

「建学の精神」に関する大学間連携による共同実践研究（第一報） — その具現化としてのチャペル活動 —

高木 総平¹⁾・楠本 史郎²⁾・志村 真³⁾

Collaborative Research on the “Spirit of Construction” through Cooperation among Universities (1st Report) — Implementation of Chapel Activity —

Shohei TAKAKI, Shiro KUSUMOTO, and Makoto SHIMURA

本報告は、中部学院大学・同短期大学部と北陸学院大学・同短期大学部との間で、2017年9月に締結された「連携協定」に基づく共同実践研究の成果（第一報）である。

両学は、福音主義（プロテスタント）のキリスト教主義を基盤に、聖書の同一聖句「神を畏れることは知識のはじめである／主を畏れることは知恵の初め」を「建学の精神／建学の聖句」と定め、地域に根差して教育研究活動を行っている。両学のキリスト教主義教育の担当者による本共同実践研究は、それぞれの大学におけるキリスト教主義教育の具体を項目毎に整理して提示し、特にチャペル活動についての振り返りを行ったものである。チャペル活動は、「建学の精神」の高揚と具現化の柱であり、両学が最も力を入れ、工夫を試みているところである。

キーワード：建学の精神、キリスト教主義学校、チャペル、神を畏れること

1. 共同研究の経緯、目的および方法

1) 共同研究の経緯、目的

2017年9月12日、中部学院大学・中部学院大学短期大学部と北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部は、連携協定を締結し、時代の要請に即した専門性と教養を身に付けた優れた人材の養成に向けて、教育、研究、地域連携などで交流・連携を図ることとした。両学は大学規模と教育分野（すなわち学科構成）が近いということもあるが、歴史を遡れば、中部学院大学・同短期大学部を有する岐阜済美学院が1947年にキリスト教主義に転じた際、片桐孝理事長の要請を受けて、番匠鐵雄学院長が理事として長年、協力した経緯がある¹⁾。

本共同実践研究は、協定書にうたわれた具体的な連携活動内容のうち、「両大学間における研究活動の連携に関する事業」として行われている。また

「内部質保証に向けた相互評価に関する事業」および「両大学間によるFD・SDに関する事業」とも関わるものである。

両学は、福音主義キリスト教（プロテスタント）のキリスト教主義に基づき、図らずも同一の聖書語句（以下「聖句」と言う）を「建学の精神」もしくは「建学の聖句」として定めている。すなわち、北陸学院は『旧約聖書』詩編111編10節の「主を畏れることは知恵の初め」を、また中部学院は同箴言1章7節より「神を畏れることは知識のはじめである」を掲げている。

その精神の教育的展開として、北陸学院大学・同短期大学部は、「神を畏れる心を育て、他者も自分も社会をも大切に築きあげていく『本当の知恵を持つ人物』の育成。真の“WISDOM”を持つ人へと成長するよう全ての教育がプログラムされています²⁾とし、また中部学院大学・同短期大学部は「そ

1) 中部学院大学宗教主事

2) 北陸学院大学・同短期大学部学長

3) 中部学院大学短期大学部宗教主事

の教育理念は、人格教育の実現を目指す、それは同じく人格として創造された他の人間との共同関係において実証されるものでなければならない。そして、この共同関係においてキリスト教精神による『愛と奉仕』を尊重する。また、そのことにより人間としての基本的なものの見方・考え方を養い、他者の痛みを理解し、責任をもって自らの使命に生きる人間の育成を志す³⁾としている。

このように、両学とも「建学の精神」の高揚と具現化に、キリスト教活動のみならず、各学部、学科の教育・研究・社会貢献活動、とりわけボランティア活動やその他の地域連携活動において努めているところである。本共同実践研究は、それらのうちキリスト教活動に関して、両学の取り組みを下記の項目に従って整理し、相互に質疑応答を重ね、それぞれが自己点検を行うことで、「建学の精神」のさらなる高揚と具現化に資することを目的とする。

2) 研究の方法

本共同実践研究会は、「建学の精神」に関わることであるので、両学のキリスト教主義教育の責任者である三名によって構成されている。中部学院大学・同短期大学部からは高木総平教授（大学宗教主事）と志村真特任教授（短期大学部宗教主事）、北陸学院大学・同短期大学部からは楠本史郎教授（学院理事長・学院長、大学・短期大学部学長）が参加している。

共同実践研究会は、2018年2月21日に北陸学院大学で開催された、連携協定に基づく事業に関する締結を受けての協議の場で設置され、同6月28日午後第1回共同実践研究会、同8月2日午前第2回共同実践研究会を、いずれも北陸学院大学理事長室にて開催した。

研究方法としては、それぞれの「建学の精神」制定の経緯を確認したうえで、キリスト教教育活動の概要を1)キリスト教関連科目、2)チャペル活動、3)その他の行事・活動、4)刊行物、5)「建学の精神」について直接学ぶ機会、といった項目を挙げて整理し、両学の教育の質的向上を図るために相互評価を行い、さらなる発展につながる改善に向けての自己点検を行うこととした。その中でも、本報告では、「建学の精神」の具現化の柱であるチャペル

活動に焦点を当てて振り返り、改善に向けての討議を行ってまとめることとした。

2. 中部学院大学・同短期大学部と北陸学院大学・同短期大学部の概要

1) 中部学院大学・同短期大学部

1-1) 前史

岐阜済美学院は、1918年4月、片桐龍子によって岐阜市溝旗町に裁縫塾として開学した。創立から1947年までは神道に基づく教育を行った。1925年4月には、高等女学校令による岐阜実科高等女学校を設置した。1928年4月には岐阜裁縫女学校を廃止し、岐阜女子高等技芸学校を開設した。また、1940年4月には岐阜実科高等女学校を組織変更し、片桐高等女学校と改称した。

1947年4月、日本基督教団華陽教会信徒の片桐孝によってキリスト教主義に転じた。

1948年4月、学制改革により岐阜済美高等女学校を済美女子高等学校（普通科、家庭科、別科）と改称した。1949年4月に済美幼稚園を開設した。1951年3月、学校法人「岐阜済美学院」の設置が認可された。

1-2) 大学・短期大学史

岐阜済美学院は、1967年4月、岐阜済美学院短期大学（英文学科、幼児教育学科）を関市倉知に開学した。1970年3月には中部女子短期大学と改称した。1980年4月、中部女子短期大学附属桐が丘幼稚園を開設した。その後、何度かの改組を経て、現在は幼児教育学科と社会福祉学科（介護福祉コースと美デザイン・コース）を擁している。

1997年4月、中部学院大学人間福祉学部が開学した。1999年4月には中部女子短期大学を中部学院大学短期大学部と改称した。2001年4月、中部学院大学大学院（人間福祉学研究科）を開設し、2003年4月には同博士課程（後期）を設置した。2006年4月、中部学院大学に各務原キャンパスを開設した。その後、何度かの改組を経て、現在は人間福祉学部人間福祉学科、教育学部子ども教育学科、看護リハビリテーション学部理学療法学科、看護学科、スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科を擁している。

2) 北陸学院大学・同短期大学部

2-1) 前史

北陸学院は、1884年10月に米国北長老教会宣教師メリー・K・ヘッセルによって私塾として開学した。前年には男子キリスト教中学校である愛真学校がトマス・ウィンにより設立されていた(1899年に廃校)。1885年3月には、キリスト教女子中学校である金沢女学校が設置認可を受け、同年9月に開校式を行った。翌1886年には同教会宣教師フランシナ・ポーターが、男女共学の英和小学校と英和幼稚園を設立した(小学校は1903年廃校)。1900年4月には、前年の文部省訓令第12号と私立学校令の影響下、キリスト教教育を守るために各種学校へ移行し、「北陸女学校」と改称した。1947年4月の学制改革により、女子の北陸学院中学部を、翌年に高等学部を設置、1951年3月には学校法人「北陸学院」に組織変更し、認可を得た。1961年4月には、金沢市飛梅町に北陸学院小学校を設置した。

2-2) 大学・短期大学史

北陸学院は、1950年3月、金沢市下本多町に北陸学院保育短期大学を設置し、1953年4月には行政の要請を受け、金沢市柿木畠に北陸栄養専門学院を設立した。1963年4月に北陸学院短期大学と名称を変更し、北陸栄養専門学院を廃校して短期大学に栄養科(後に食物栄養科)を増設した。また、1964年4月には英語科を増設した。1967年9月に金沢市三小牛町に移転。1968年4月には教養科を増設して、専攻科保育専攻設置した。1977年4月には野々市町本町に短期大学附属扇が丘幼稚園設置した。さらに1999年に人間福祉学科を新設、その後、何度かの改組を経て、現在は食物栄養学科、コミュニティ文化学科を擁している。

2008年4月、北陸学院大学人間総合学部が開学した。また、北陸学院短期大学を北陸学院大学短期大学部に名称変更した。同時に、愛真学校以来の男子キリスト教教育を復興するため、学院全体を男女共学とした。2012年4月には北陸学院大学人間総合学部社会福祉学科を改組し、社会学科を開設。2017年4月には北陸学院大学人間総合学部幼児児童教育学科を子ども教育学科に名称変更して、現在に至っている。

3. 「建学の精神」制定の経緯

両学の教育理念および「建学の精神」制定の経緯は以下の通りである。

1) 中部学院大学・同短期大学部

岐阜済美学院はその教育の理念に関して、建学の精神を示す聖句として「神を畏れることは知識のはじめである」を掲げ、その目的として「福音主義のキリスト教に基づいて、教育基本法及び学校教育法に従い、教育事業を経営すること」⁽⁴⁾と規定している。

岐阜済美学院の特色は、片桐龍子により神道の精神による女子教育という理念から始められたが、戦後、後継者である片桐孝により、キリスト教学校教育同盟に属する学院として再出発したというところにある。その経緯からして、排他的にキリスト教のみの宣教を目的とするのではなく、聖書の精神を教育の根幹におくキリスト教主義学校(クリスチャン・スクール)の道を進んでいる。

現在の「建学の聖句」がどのように制定されたかについては、以下の通りである。

「本学院がキリスト教主義学校として再出発した1947年以降、教育の基として幾つかの聖書章句が用いられていた。済美高等学校の建物の礎石に刻まれている聖句がそのことを伝えている。一番古い1957年の礎石には『神を畏るるは知識の基なり』(箴言1:7)と刻まれている。さらに、1962年『真理は汝らに自由を得さすべし』(ヨハネ8:32)、1966年『あなたの若い日にあなたの造り主を覚えなさい』(伝道の書12:1)とある。これらを選んだのは片桐孝先生で、様々な機会にこれらの聖句が用いられた。

1969年ころ、それらの聖句のうち、箴言1章7節を「建学の聖句」とすることになった。ところが、1987年に出版された『新共同訳聖書』では、「主を畏れることは知恵の初め」と以前の翻訳が変更された。そこで、聖書の翻訳が変わる度に学院の「建学の精神」の文言が変更されることのないよう、1997年10月に学院長確定として現在のものを恒久的な「建学の精神」とした。⁽⁵⁾

2) 北陸学院大学・同短期大学部

金沢女学校は、その初期から、「主を畏れることは知恵の初め」を「建学の精神」としてきた。「1889

年には学校標語〈主を畏れることは智慧のはじまり〉(詩篇111・10)を定めた」⁶⁾とあるとおりである。この句を定めたのは、創立者であるメリー・ヘッセルに遡る。

「学校標語の詩編111編10節は、創設者ヘッセルの愛誦聖句であった。教育は知識を授けるだけでなく、神を畏れる信仰によって人格を養うことが大切であるというヘッセルの信念が込められていた。以来、北陸学院はこの聖句を建学の精神としている。」
「チャペルの正面には学校標語『エホバを畏れることは智慧の根本なり』という聖句(詩編111編10節)が掲げられた。」(1890年6月の講堂完成に関して)⁷⁾

実際には、長い間、ヘッセルが愛したのは、箴言1章7節にある、同様の聖句であると考えられてきた。しかし1985年の北陸学院創立100周年に当たり、『北陸学院百年史』編纂の作業が進められた際、ヘッセル愛用の聖書では、箴言ではなく詩編111編10節にアンダーラインが引かれていることが確認された。そこで、創立当初からの建学の精神は、詩編111編10節であると判断され、創立100周年以降は、この言葉を学院の基本聖句として定めることとなった。

これを受け、創立130周年に当たり纏められた記念誌には次のように記される。「これまで見てきた

ように、北陸学院の130年はまさに激動の時代でした。しかし、その中であって、これまで見てきた指導者たちが、ずっと変わらず、受け継いできたものがあります。それは北陸学院の建学の精神『学校標語』です。宗教改革者ジャン・カルヴァンは1557年『ジュネーヴ・アカデミー』という学校を作って、そこにこの聖書のことばを掲げました。メリー・ヘッセルはそれに倣ったようです。金澤女学校が開校して間もなく、この詩編111編10節のことばが『学校標語』として選ばれました。・・・北陸学院のすぐれた指導者たちは『主を畏れる人たち』でした。『主なる神から知恵とすぐれた思慮を得て』、自分に与えられたミッション(使命)を自覚し、それを果たした人たちでした。・・・」⁸⁾

現在はこの建学の精神を具体化するものとして、“Realize your Mission”「あなたの使命を実現しよう」を学院全体の標語としている。

4. 「建学の精神」に基づくキリスト教教育の概要

両学のキリスト教教育の概要を整理して以下に示す。

表1 両大学の比較

| 中部学院大学・同短期大学部 | 北陸学院大学・同短期大学部 |
|--|--|
| (1) キリスト教関連科目 【大学】 キリスト教科目 ・キリスト教概論Ⅰ(半期・全学必修) ・キリスト教概論Ⅱ(選択) ・宗教と人間 ・キリスト教福祉論(通信教育部) 隣接科目 ・死生学(オムニバス) ・生命倫理社会学科専門科目 ・宗教と社会(2～4年生選択) 【短期大学部】 ・キリスト教概論(半期・全学必修) ・キリスト教文化(今年度未開講) ・キリスト教音楽(同上) | (1) キリスト教関連科目 【大学】 北陸学院アイデンティティ教育・キリスト教科目 ・北陸学院セミナーⅠ(1年生全期必修)、Ⅱ(2年生全期必修) ・キリスト教概論Ⅰ(1年生前期必修)、Ⅱ(後期必修) ・キリスト教人間論Ⅰ(2年生前期必修)、Ⅱ(後期必修) 子ども教育学科専門科目(新カリキュラムに対応) ・キリスト教と教育(3年生選択) 【短期大学部】 ・北陸学院セミナーⅠ(1年生全期必修)、Ⅱ(2年生全期必修) ・キリスト教概論Ⅰ(1年生前期必修)、Ⅱ(後期必修) 食物栄養学科2年生必修 ・人間の探究Ⅰ(前期)、Ⅱ(後期) コミュニティ文化学科2年生必修 ・キリスト教と生活(前期)、キリスト教とホスピタリティ(後期) |

| | |
|--|---|
| <p>(2) チャペル活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎週2回(月・木)のチャペル礼拝(10:45～11:05)関キャンパスでは月・木曜、各務原キャンパスでは木曜 <p>(3) その他の行事・活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宗教講演会(前期)、クリスマス礼拝・祝会(後期)、卒業礼拝(3月) ・キリスト教研修会(教職員対象、前後期1回ずつ) <p>(4) 刊行物</p> <p>(4) -1. 定期刊行物</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『知識のはじめ 私たちの岐阜済美学院』(高大共通テキスト) ・『桐ヶ谷通信』(宗教委員会発行、4ページ立て、年2回) ・『光の子として』(チャペル・トーク集、年1回) <p>(4) -2. 不定期刊行物</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『中部学院大学短期大学部40年誌』2010年 ・『済美六十年の歩み』1979年 | <p>(2) チャペル活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・月曜～金曜のチャペル礼拝(12:10～12:30) 宗教主事(毎週水曜日、学生宗教委員が司会を担当)、キリスト者教職員、地域教会牧師、ゲスト、キリスト者同窓生による奨励。学生による活動報告(よりそいの花＝東日本大震災被災地ボランティア、スイーツ研究所、図書館サポーター、アクティヴ・イングリッシュ参加者)と宗教主事の奨励からなる礼拝など。 ・6月に1、3年生特別伝道礼拝、10月に2、4年生特別伝道礼拝 ・6月に花の日礼拝と訪問、11月に収穫感謝礼拝と訪問。数週間前から学生宗教委員がポスターを作成、礼拝後には参加と献金を呼びかける。 ・9月に北陸学院創立記念礼拝 ・12月に1、3年生、2、4年生のクリスマス礼拝。数週間前から礼拝後に、学生宗教委員がクリスマス献金を呼びかける。 ・3月に短期大学部2年生と大学4年生の卒業感謝礼拝 <p>(3) その他の行事・活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4月に学院全教職員対象の、新年度開始の集い(礼拝と懇談) ・9月第2土曜日に学院全教職員対象の、創立記念礼拝(礼拝と研修) ・11月最終水曜日17:10よりフレンドシップホールでクリスマスツリー点灯式 ・大学・短大教職員および学生対象の聖書を学ぶ会を毎月1回開催 ・毎年、北陸学院ウイン館にて学院史に関連する展示。北陸学院史料編纂室 ・大学・短大同窓会主催バイブルクラスを年3回、12月にクリスマス礼拝を開催 <p>(4) 刊行物(不定期刊行)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中澤正七『日本の使徒 トマス・ウイン伝』1932年 ・中澤正七『長尾巻物語 歓喜の聖徒』1936年 ・中澤正七『北陸五十年史』1936年 ・『北陸学院七十年の歩み』1955年 ・『北陸学院八十年史』1966年 ・『北陸学院百年史』1990年 ・梅染信夫『北陸学院125年の歩み』2010年 ・梅染信夫『北陸学院の先達たち』2015年 ・楠本史郎『中澤正七 北陸女学校と北陸伝道にささげた生涯』2015年 |
|--|---|

| | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・『70年の歩み』1988年 ・『済美80年の歩み』1998年 ・『済美90年のころ 岐阜済美学院 済美高等学校 創立90周年記念誌』2008年 ・和木康光『神と人とを愛して 岐阜済美学院物語』2000年 ・『愛深き道 片桐孝先生追悼文集』2002年 <p>(5)「建学の精神」について直接学ぶ機会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション時の「キリスト教教育について」の時間 ・「キリスト教概論」(短期大学部)のシラバスに掲載されており、『知識のはじめ』に基づいて講義されている。 | <ul style="list-style-type: none"> ・梅染信夫『北陸学院歴史ものがたり』2017年 ・梅染信夫『トマス・ウィン宣教師 伝記と説教』2018年 ・毎年度5回発行の教職員対象「学内報」の「キリスト教センターから」のページ <p>(5)「建学の精神」について直接学ぶ機会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎年4月の宗教オリエンテーション ・「北陸学院セミナーⅠ」における講演のなかで ・「キリスト教概論Ⅰ」のシラバスに掲載されている。(「仕える」ことの関連で) ・学院教職員対象 4月「新年度開始の集い」と9月「創立記念日」 |
|--|---|

5. チャペル活動の特色

1) 中部学院大学・同短期大学部

①チャペル活動の特色

年間延べ90回開かれるチャペルで話すのは、近隣教会の牧師が約30回、その他は教員と職員が担当している。10年ほど前のことではあるが、学生がスピーチをしたこともある。表現法も多様で、オーソドックスな話し方が中心なもの、ギターやウクレレを弾きながらメッセージ・ソングを歌ったり、命をテーマにした「絵本」を、プロジェクターを使って読み聞かせたり、と様々である。また、パイプ・オルガンの演奏に静かに耳を傾けたりすることもある。そうした内容にひかれて集まってくる、レギュラー・メンバーといってよい学生、教職員が少なからずいる。現代社会においては、対人関係における衝突や機能不全が散見される。その社会に対人サービス職に就く学生を教育する本学にあっては、真の人間の価値、また自由と自制の関係などについて語り合い聞き合うことができるようなチャペルでありたいと願うものである。

②チャペル活動についての2017年度総括

中部学院大学および中部学院大学短期大学部では、2017年度宗教活動を毎週2回(月・木)のチャペル礼拝の充実集中させて行った。チャペルでの奨励者は本学の両宗教主事および教職員、近隣教会

の牧師(牧師の担当は前後期併せて延べ22回)である。チャペルの平均出席者数は一昨年に比べて前期は増、後期はかなり減少している。(2017年度の平均出席者数=103名、前期144名、後期62名。創立記念礼拝の540名、クリスマス礼拝364名、卒業礼拝は統計から除外)したがって、学生・教職員の自発的出席を促すための取り組みを図る必要がある。そのためには、チャペル自体の充実も必要と考えられる。

特記事項としては、5月14日の「開学記念日」にあわせて5月15日の2限を全学休校とし、「創立記念礼拝」を行い、志村主事が創立者の学院設立とキリスト教主義に転換した際の志について、特に「灯を受け継ぐ」ということにポイントを置いて語った。また音楽礼拝として7月3日と12月4日、森岡泰子先生が素晴らしい響きを聞かせてくださった。12月21日関キャンパスにて行われたクリスマス礼拝では、沖縄キリスト教学院大学宗教部長の金永秀先生が「飼い葉桶の乳飲み子、イエス・キリスト」と題して、キリストが小さく貧しい存在として降誕されたクリスマスの意味をお話しくくださった。各務原キャンパスでは12月19日にクリスマス会を開き、高木主事が「真の王とこの世の王」と題してメッセージを語った。これには近隣の住民の方々も参加くださった。また、3月19日には卒業礼拝を行い、高木主事が本学を巣立つ卒業生にメッセージを語った。

3月末には、チャペル・トークや宗教講演会等のスピーチを収めた、チャペル・トーク集『光の子と

してⅩ』を発行し、全教職員、新入学生、保護者会参加者、近隣教会およびキリスト教主義学校に配布した。

2) 北陸学院大学・同短期大学部

①チャペル活動の特色

本学のチャペルは、毎日礼拝を守り、聖書の言葉により自分を見つめる習慣を身に着けることと、礼拝の役割を学生が担う機会を増やすことを目指している。クリスマスツリー点灯式やクリスマス礼拝は、学生宗教委員が司会、聖書朗読、点灯を担当し、またハンドベルクラブや手話クラブ、音楽サークル、アカペラ部も参加している。

②チャペル活動についての2017年度総括

2017年度、北陸学院大学・短期大学部では、例年のように毎週、月曜から金曜まで毎日、12:10から12:30までの20分間、前期・後期とも、各75回余りの礼拝を行った。奨励担当者は、大学・短期大学部教職員が92回、他部局教職員が7回、地域諸教会の牧師が41回であり、宣教師による音楽と証しが6回、ゲストスピーカーが1回、シンガーソングライターの竹下静によるゴスペルコンサートと証しが1回、また学生と宗教主事による礼拝が5回、同窓生による礼拝が3回、クリスマス週間の礼拝（世界のクリスマス、クリスマス物語、クリスマス劇、賛美歌）が4回、行われた。他に各学期末には、祈りによる礼拝が各4回行われた。牧師による特別伝道礼拝が、前期は1・3年生、後期は2・4年生を対象として行われ、12月にはクリスマス礼拝を二部で行った。毎週1回、学生が礼拝司会と献金、また奏楽を担当した。活動報告を含む奨励も6名が担当した。

1・2年生は、礼拝出席が、キリスト教関連の必修科目となっているため、半分以上の出席が求められる。大半の学生は、規定回数出席後は礼拝に出席しなくなるが、数人は年間を通じ、ほぼ毎回出席した。昨年度の礼拝賞受賞者は3名であった。礼拝堂では礼拝開始まで、毎月定められた賛美歌・曲を聞き、参加者が礼拝への備えをする。礼拝は前奏に始まり、毎月指定された賛美歌の中から1曲が選ばれ、全員で歌う。司会者が当日、奨励者が指定した聖書箇所を朗読、奨励者がメッセージを語り、祈る。後奏の後、最前席から順番に退出し、出口で出席カー

ドに出席印を受ける。

司会者は各学科宗教委員の教員と、水曜献金礼拝は学生宗教委員が担当する。奏楽は音楽担当教員とその指導により学生が行う。奨励者はキリスト者教職員、地域諸教会牧師、ゲストが行った。その他、諸活動の学生代表者（被災地支援「よりそいの花」、スイーツ研究所、図書館サポーター）とアクティブ・イングリッシュ受講者の報告と宗教主事の奨励との組み合わせで、またキリスト者同窓生が1週間、奨励を担当した。毎月1回、国際OM宣教師による音楽礼拝を開催した。

1、2年生は前期、後期とも、38回以上の礼拝出席が義務付けられ、必修科目である北陸学院セミナーⅠ、Ⅱの単位の一部となる。3、4年生は自由に参加するが、司会や奏楽当番、活動報告者以外の出席は少ない。毎日、礼拝出席カードに印が押され、一杯になったページを切り取ってその裏に礼拝での気づきなどを書き、ミニレポートとして提出する。礼拝出席規定回数を満たさなかった者には、追加レポート、補講を課した。例年、1割近くの学生がメイクアップの対象となっている。

一部の学生の礼拝における態度が課題となっている。私語、スマホを見入るなどの他、賛美歌を歌う声が小さい、聖書箇所を十分に読まないなど、礼拝生活が十分根付いているとは言えない。原因として、昼休みの時間に行われ、集中しにくいこと、大学全体の中心的な時間と位置付けている一方、教職員の出席が少ないことなどが挙げられる。対策として宗教オリエンテーションの充実、教授会等で教職員に礼拝参加を呼び掛けること、司会や奏楽、活動報告など、学生が担う役割を増やすことなどを心がけている。聖書の言葉と向き合い、自分を見つめる重要な時であることを知らせ続けていく必要がある。

6. チャペル活動についての振り返り (相互評価)

1) 中部学院大学・同短期大学部の振り返り

今回は「建学の精神」を考えるに当たり、その一番の具現化であるチャペル活動についてまとめることにした。そこで上記の表1に基づいてチャペルを中心に意見を交換し、そのあり方を検討した。

北陸学院は1、2年生必修の北陸学院セミナーの

授業の一部としてチャペルを位置づけており、本学では、キリスト教概論の成績に少し加点することで出席を促している。北陸学院では、1割に満たない出席しない学生に対しては、宗教委員の教員が声かけをするなどしている。またレポート等で欠席をカバーしている。本学では、出席者数は学生の1割未満である。本学のチャペルとの大きな違いは、北陸学院は毎日チャペルがあること、その週一回は司会、奏楽を学生が担当することである。スピーチに関しても、学生がボランティアやサークルの活動報告を行うこともあり、その場合はチャペルの意味を考え、それに対して学院長がコメントするというのである。また同窓生に話していただく週間もある。本学と同様に近隣の牧師に来ていただくこともあり、教師が担当するより、ゲストや学生のスピーチの方が参加学生は集中しているとのことである。

同窓生や学生のスピーチは中部学院では行っていないので、今後取り入れることを考えたい。学生の宗教委員の制度が北陸学院にはあり、各学年、学科から2名ずつ選ばれた委員が、上記の司会や月一回の献金日の当番に当たっている。それに加えて新入生のオリエンテーションセミナーの礼拝や花の日、収穫感謝日、クリスマスツリー点灯式の行事の運営にも携わっている。大学としてはもっと学生が運営をしてほしいと考えている。この辺りも本学でも行いたいことである。

また教職員のチャペル出席に関しては、学院長から教授会で呼びかけ、学生の出席カードの押印を順番に担当してもらっている。教職員に理解、協力してもらうことは、キリスト教学校では不可欠であり、これからは、本学でも同様であるが、キリスト教教育とキャリア教育、授業との関係をもっと関連づけて模索することも大きな課題である。

行事や研修に関しては、年度開始の集いや新任教師の就任式、オリエンテーションは礼拝から始め、秋の研修や創立記念の礼拝を通して、チャペルやキリスト教への理解を求めている。チャペルの奨励を学部長、学科長に担当してもらいたいとの願いがあるが、本学でも可能かどうか考えたい。また地域の教会との連携を重視し、牧師招待日を設け交流や意見交換を図っている。学院長が牧師の研究会に出向くことも心掛け、この地域の教会との交流は本学でも同様に力を注いでいる。

このように概観したが、北陸学院においては、チャペルを中心にやるべきことをすべてやっているという印象をもった。何より本学に比べると倍以上のキリスト教教育の歴史があり、本学が学ぶことは多々あることを教えられた。

そのチャペルを中心としたキリスト教教育の目的は学院長の言葉によると「多様性を担保するもの」である。すなわち、「チャペルでは通常の世界とは異なった価値観が提示される。また、聖書の読みとは疑問を呼び起こすものであり、何かを思い込ませるのではなく問いかけである。そのためには『語る自由』、批判的精神が宿るものでありたい。」これは本学も目指すもので、心から同意できることである。北陸学院と同様に、本学のチャペルもそのことを意識して組んでいる。

一般的には、キリスト教教育というと、狭い枠組みを押し付けると思い込んでいる人もいるが、決してそうではないということ、建前とは裏腹に多様性が軽視されているこの時代、この社会にあって、建学の精神を根底に置く、キリスト教教育が果たす責任は大であると、この共同実践研究から強く教えられている。

2) 北陸学院大学・同短期大学部の振り返り

今回、中部学院大学・同短期大学部との宗教活動に関する協議、交流、研究を行い、視野を広げることができた。同じプロテスタント・キリスト教の精神に立ちつつ、各々がその状況に応じ、さまざまな宗教活動を展開している。共に聖書の言葉を建学の精神として根幹に持ち、その上に宗教活動、そして大学教育・研究・社会貢献活動を行っている。とくに、神道の精神による女子教育を志して始められた岐阜済美学院が、戦後、多くの労苦を経てキリスト教主義による教育へと転換し、幼稚園、高等学校、大学・短期大学部、また大学院における教育の礎に聖書の言葉を置いたことは興味深い。日本の地方におけるキリスト教土着化の過程の一つとして注目し値する。

今日、とくに高等教育において建学の精神をカリキュラム全体のなかにどう位置づけ、具体化するのかということは、大きな課題である。各学部、各学科、さらには各科目の位置と相互の関係性を、履修モデルツリーとして示しつつ、その全体がどのよう

なキリスト教教育の構造を成しているのかを明確にする必要がある。その視点から、ディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを見直すことが求められる。さらにアセスメント・ポリシーを、キリスト教教育の視点から確立することにより、高等教育全体の質を評価し、向上させる方向性が見えてくる。こうして宗教活動と教育活動、研究、社会貢献活動が一体として捉えられ、教職員・学生はもとより、地域全体の理解を図ることを目指したい。また、全世界的教育改革の方向性を見据えつつ、北陸学院新スタンダードを再構成し、幼稚園から大学までの本学院のキリスト教教育の全体構造を明確化・可視化するよう努めたい。その意味でもこの共同実践研究が大きな意義を持つと考える。

7. 今後の課題

今後の課題として次の3項目を挙げたい。①シラバスの相互評価、②「建学の精神」と各学部学科のカリキュラムとの有機的連携、③「建学の精神」を共有する他学への招き。

①シラバスの相互評価については、両学のシラバスを既に整理して一覧にしてあるので、今後の研究会において、それぞれの工夫点、特色について発題をなし相互評価を行いたい。

②現在、北陸学院大学・同短期大学部において、各学科のカリキュラムと「建学の精神」の有機的連携に関する検討がはじめられている。今後の展開を待って、その経緯および趣旨についての報告を聞きたい。中部学院大学・同短期大学部では、各学部学科の3つのポリシー（アドミッション、カリキュラ

ム、ディプロマ）において「建学の精神」あるいは教育理念に触れられているところがあるものの、全学科というわけではない。各学科のカリキュラムにおいては、資格関連科目が大半を占めているという現状を考慮しながら、学科の教育内容と「建学の精神」の有機的連携性をさらに強めるための検討が課題としたい。このことには全学的議論が求められる。宗教主事らによる本研究会での成果を得ての発議が教育理念および教育内容の向上に資するものとなることを願っている。

③中部地区には同一の「建学の聖句」を掲げる他学があるので、次回以降の共同実践研究会に参加いただけるよう、呼びかけたい。

注 釈

- (1) 和木康光『神と人とを愛して 岐阜済美学院物語』2000年、156ページ。番匠は1948年11月から1980年5月まで岐阜済美学院の理事を務めた。
- (2) 学校法人北陸学院 HP から (<https://www.hokurikugakuin.ac.jp/sj/about/statement.html> 2018年8月29日アクセス)
- (3) 『中部学院大学自己点検評価報告書』2017年度、3ページ
- (4) 学校法人「岐阜済美学院」寄附行為3条
- (5) 岐阜済美学院『知識のはじめ ～私たちの済美学院～』2014年、26～27ページ
- (6) 『北陸学院の先達たち』2015年、84ページ
- (7) 『北陸学院125年の歩み』2010年、11ページ
- (8) 『北陸学院歴史ものがたり』2017年、40ページ
- (9) 学校法人「岐阜済美学院」評議員会での「宗教総主事報告」から